

(対象事業：~~地域連携強化事業~~ 地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：考古系博物館における幼児への取り組み
ー幼児向け体験学習プログラムの試行と評価ー

事業者名：兵庫県立考古博物館

住 所：兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

TEL：079-437-5589

FAX：079-437-5599

HPアドレス：<http://www.hyogo-koukohaku.jp/>

連携事業者名：社会福祉法人和坂福祉会蓮池保育園
播磨町立蓮池幼稚園

会 場：兵庫県立考古博物館ほか

事業期間：平成22年6月1日～平成23年3月15日



1. 館の使命と本事業の関係

考古学の資料を用い、双方向的な展示・体験学習等を通じて県民と地域文化を探究し、新たな「ひょうご文化」の創造と愛着と誇りに満ちた地域社会の形成に寄与することを使命としている。そのために、人材の育成・研修や事業ツール・プログラムの企画・開発を行うなど、「考古博物“環”ひょうご」の中核施設としての役割を果たすことを目的としている。

本事業は、地元の保育園・幼稚園と協力しながら、社会教育施設等への貸出といった新たな館の事業展開も視野にいれつつ、幼児向けのプログラムとツールの開発を行った。

2. 企画内容

①事業目的

いままで対象とした小学校高学年ではなく、幼児とその親を対象とすることで、次世代における地域の担い手と博物館とのつながりの強化を図ることを目的とする。その結果、幼児の来館に伴い、親や祖父母といった二世三世の来館を誘導し、生涯学習の拠点づくりに博物館の活用を図るという点においても他のモデルケースになることができる。また、製作したツールの貸出をとおして、幼稚園・保育園や他の博物館との連携をはかり、ネットワークの強化を促進することができる。

②事業概要

考古系博物館にふさわしい幼児向け体験学習プログラムを試行、評価するため、プランナー、エドューケーター、地域の保育園や幼稚園の園長からなる「幼児のための体験学習プログラム開発委員会」を組織し、5回の委員会を開催、2回の試行を行った。また、委員会では「滋賀県立琵琶湖博物館」（滋賀県大津市）を訪問し、博物館展示と幼児をつなぐハンズ・オンツールやその運営について調査し、プログラムの改良に役立てた。先進事例調査として、キッズプラザ大阪を訪問し、運営などの調査をおこなった。

こうした試行や評価を通じ、体験プログラムで使用するツールとして「おおむかしかみしばい」の『おなかいっぱい』とその解説冊子、ごっこ遊びするためのハンズ・オンツール「やよいごっこ」の『やまのむら』を制作した。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

○第1回委員会（平成22年10月28日 兵庫県立考古博物館）

内 容：今回の事業である考古系博物館における幼児への取り組みについて、事務局からの概要説明を行った。現在の幼児向けプログラムを試行し、問題点の抽出と評価、改善を行うことを確認した。

○第1回先進事例調査（平成22年11月2日 滋賀県立琵琶湖博物館）

内 容：幼児向けの体験学習室「ディスカバリールーム」を見学した。多世代に開かれた博物館で、展示と幼児向けハンズ・オンツールの関連性、ツールの仕様について検討する。特にツールの高さについて検討した。また、子ども同士でできるツールもあり、今回製作する紙芝居も子どもでも演じられる仕様を含めることとした。

○第2回委員会（平成22年11月2日 滋賀県立琵琶湖博物館）

内 容：先進事例調査の後、引き続き委員会を開催し、紙芝居の原案を制作した。内容は「米づくりを知らない村が、米作りを始めるようになり、暮らしが安定する」となった。特に「狩猟採集の不安定さと苦労」「実った米への感謝、感動」を伝えられるようにすることとなった。その際、米、稲、ご飯といった紛らわしい用語が混在するので整理し、タイトル案は『サブのおみやげ』が出たが、再度検討することとなった。

○第1回試行（平成22年11月29日 兵庫県立考古博物館）

内 容：連携施設である蓮池保育園児（年長組）約40名を対象とし、当館で昨年度制作した「おおむかしかみしばい」「やよいごっこ」の両方を試行した。それぞれのツールが正しく理解されていることを確認できた。また、プログラムとして、紙芝居の内容が「やよいごっこ」に反映されていることも確認でき、両方のツールで一つのプログラムとして成立していることが確認できた。



第1回試行

○第3回委員会（平成22年11月29日 兵庫県立考古博物館）

内 容：第1回試行のあと、引き続き委員会を行った。「おおむかしかみしばい」のタイトルを「おなかいっぱい」と決め、頁割りなどの修正を行った。「やよいごっこ」については、紙芝居の内容と合うようにし、関連性をもたせることとした。

○第2回先進事例調査（平成22年12月15日 キッズプラザ大阪）

内 容：幼児（小学校3年生程度まで）に特化した施設で、特に運営について調査した。各ツールをサポートするボランティアの来館者への関わり方、研修方法など、個々のツールや館によって事情は異なるものの、参考になる点が多くあった。

○第2回試行（平成23年1月21日 播磨町子育て支援センター）

内 容：「おおむかしかみしばい」の試行を幼稚園・保育園児（年長）の約100名を対象に行った。ほぼ全員が話を集中して聞き、試行後の質問にも正確に答えていて、内容がきちんと伝わっていることがわかった。

○第4回委員会（平成23年1月21日 兵庫県立考古博物館）

内 容：第2回試行の後、委員会を開催した。紙芝居の解説本について検討し、言い回しや内容を整理した。「やよいごっこ」については、低い台を用意し、台が折りたたんで移動できることで貸出にも対応できるようにすること、床にシートを敷き、膝立ちになっても痛くならないようにすること、といった改良点があげられた。

○第5回委員会（平成23年2月15日、兵庫県立考古博物館）

内 容：各ツールの最終確認を行い、運営方法や今後の展開について検討した。

（2）参加者の数

参加者人数 延べ 59 人（委員会等）

内 訳：委員会 第1回8名（委員4名、事務局4名）
第2回6名（委員3名、事務局3名）
第3回7名（委員4名、事務局3名）
第4回8名（委員4名、事務局4名）
第5回7名（委員4名、事務局3名）

先進事例調査 第1回6名（委員3名、事務局3名）
第2回2名（事務局2名）

試行 第1回7名（委員4名、事務局3名）
第2回8名（委員4名、事務局4名）

（3）事業により作成した印刷物等

○ ハンズ・オンツール「やよいごっこ」 幅90cm、長さ180cm

○ 「おおむかしかみしばい」 『おなかいっぱい』 大・小
『海のお米』 小

○ 「おおむかしえほん」 『おなかいっぱい』 A5版横型

○ 「チラシ」 A4縦型

○ 『事業実施報告書』 A4版縦型



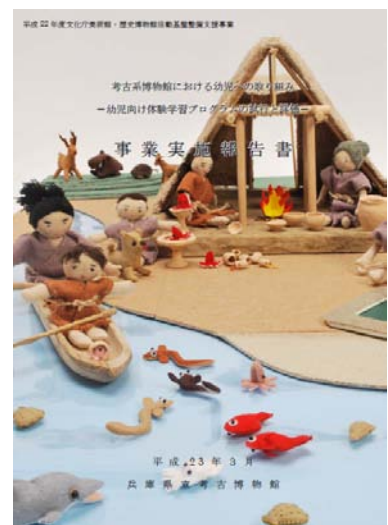
やよいごっこ



『おなかいっぱい』



チラシ



事業実施報告書

4. 事業の成果及び今後の課題

これまで、当館ではユニバーサルデザインに基づきながら、主に小学校高学年を想定した展示、およびツールといったハード面を整備した。その結果、歴史学習を始める小学校6年生の春の校外学習先として多数の来館者が訪れることとなったのであるが、同時に来館される多数の幼児に対する準備は不十分であった。こうした幼児やその親に対しても博物館教育が提供できるのではないかと考え、昨年度に学習プログラムとツールを開発した。そして、紙芝居については、平成22年6月～同23年1月に16回上演し、その都度アンケート調査を行った。理解度からツールと



アンケート調査

しての最低条件をクリアーしていることがうかがえ、「なまけ者から働き者になった」「何でも自分たちで作っていた」「昔」などが印象に残っており、特に主人公である弥生人コタローのキャラクター性に関する答えが多かった。昔の人との距離が縮まっていることの証である。

また、紙芝居の効果は、もう一つのツール「やよいごっこ」においてもうかがうことができた。「やよいごっこ」がツールとして適正に、そして自由に遊ばれていることがうかがえただけでなく、紙芝居を見て知り得た「昔の人はタコ壺でタコをとる」という事実が「やよいごっこ」の中に見事に取り入れられていた。すなわち、両ツールが一つのプログラムとしてつながったのである。このようなツールをつなげる幼児たちの行動は常設展示、屋外展示へとさらに大きなツールへと広がることを予感させる。

開発したプログラムには、ツールと幼児との間に入る人の存在が不可欠である。今後は、このプログラムを運営する人にとって必要な心構えをある程度マニュアル化しなければならない。ツールの貸出に対応していく上でも技術を共有することが重要である。幼児とツールの間で適当な距離を保ち、過大に干渉せずに自由な遊びを誘うような心構えが必要で、こうした運営する人が介在することにより、プログラムとしてより完成度の高いものにすることができる。そして、今回のツールがそれだけで固定し、完結するのではなく、多くのスタッフに関わるこ



「やよいごっこ」とスタッフ

とによって、ツールをきっかけに展示、さらには史跡公園を含めた館全体に大きく広げることが可能となる。利用者がツールで遊ぶだけが目的ではなく、遊びをきっかけに博物館全体へと利用できるよう、博物館への一つの導入部であることを常に意識し、多くの方々とかかわりあいをもちながらさらに大きく展開していく必要がある。

また、事業を行うにあたって幼稚園、保育園の協力を得ることができた。共に事業を進める中で、地域の方々に当館の使命や役割を理解して頂けたことも大きな成果である。